

19世紀後半：20世紀前半米国における石油産業と環境・地域社会問題：都市環境史の進展を踏まえて

張, 淼

<https://doi.org/10.15017/1654640>

出版情報：Kyushu University, 2015, 博士（経済学）, 課程博士

バージョン：

権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)

氏 名	張 森(ミョウ)			
論 文 名	19 世紀後半－20 世紀前半米国における石油産業と環境・地域社会問題 －都市環境史の進展を踏まえて－			
論文調査委員	主 査	九州大学	教授	田北 廣道
	副 査	九州大学	教授	藤井 美男
	副 査	九州大学	准教授	北澤 満

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

米国学界では、1990 年代から石油産業史を環境史の観点から再検討する動きが活性化してきた。本論文は、この新潮流を踏まえつつ、都市環境史にあって緊急の検討課題に据えられている「エネルギー・都市・環境」の三位一体的考察の一つの解答を寄せる試みである。

対象地域には、米国石油産業誕生の地となった 19 世紀後半ペンシルバニア州（オイル・リージョン）と 1920 年代に米国有数の産油州となったカリフォルニア州（ロサンゼルス地区）が取り上げられている。論文の考察の力点は、旅行記、郡史・市史、新聞記事、各種の小冊子、商工会議所議事録など多様な史料を駆使した石油開発と関係する様々な環境問題の再現、それら環境問題の解決に当たる市当局・市民・企業の取り組み、の 2 点にあるが、その際、地表権の所有者・賃借人に優先的開発権を認める「捕獲の原理」が支配した 19 世紀後半と、資源浪費に歯止めをかけ、公有地から得られる収益をできるだけ国民に還元する狙いをもった「保全主義」が台頭する 20 世紀初頭とを対比しつつ接近している。そこから得られた主要な成果は、下記のようにまとめられる。

19 世紀の事例研究では、ブラックの 2000 年著書を叩き台にして、社会的構成主義では捉えきれない環境破壊の諸相を追究し、「人間・自然の交互関係」を立体的に再現した。それと同時に、資源の一過性を象徴するブームタウン・ピットホールとはタイプを異にする都市を取り上げ、環境規制が石油開発のなかで霧散したこと、そして原油生産・精製部門での地域を挙げた取り組みにも関わらずスタンダード石油との競争に敗北したこと、を明らかにした。20 世紀前半の事例研究では、1929-30 年ロサンゼルスの一市区ヴェニスにおける石油開発をめぐる市当局の取り組みを追跡し、その後、市内開発禁止を徹底したロサンゼルス市と、近隣の小都市ハンティントンビーチの比較検討に進んだ。ゾーニング条例に基づく認可制度も、ひとたび開発が始まれば条件の厳格化によっても歯止めがきかず、徹底した環境破壊・生活妨害を経験したロサンゼルス市当局は、商業会議所・経済団体と一丸となって戦った。他方、スタンダード石油に対抗する 60 社以上の独立系企業が本拠を構えるハンティントンビーチでは、世界恐慌期にも生産調整の動きに抗して一貫して開発戦略をとった。1932 年からは州政府の財政逼迫と失業問題の深刻化のなかで、ロイヤリティ支払いを代価にして干潟地開発に邁進した。

米国石油産業史に環境史の視点から接近して、石油生産の動向を左右する要因として土地所有権・政治的関係の意義（セイビン）や市当局・地元経済・市民組織の果たした大きな役割（エルキン）などを明らかにし、この分野の研究において日本学界の先鞭をつけた意義は大きい。

本論文調査委員会は、張 森氏の論文が、博士(経済学)に相応しい内容を備えると判断し、ここに推薦するものである。